佳作

アルバム

沖縄県 沖縄県立豊見城高等学校一年　大城 瑠花

「あんたがちゃんとやらないからでしょ。」
「やってるし。」
もう何度お母さんとこういう会話をしたか分からない。会話というより、言い合いといったほうが正しいかもしれない。今になってみると、何をそんなに言い合っていたのだろうと思う。たいていまだ課題をやっていないとか、家でだらけすぎだとか、そういうことをお母さんに言われることが多かった気がする。だけど私からすると課題はちゃんと提出期限に間に合うようにやっているし、家でだらけていることだって家なのだからだらけてもいいだろうと思う。やるべきことをやっているんだからいちいち口出ししないでほしい。そもそもそんなふうに言われたら反抗したくなるのも当然だ。
そんなことを思いながら過ごしていたある日、家で昔のアルバムを見つけた。表紙にかわいらしい動物やお花の絵が描かれてある数枚のアルバム。いつもなら見つけても中を見ようなんて思わないけど、その日はなぜだか見てみようと思った。きれいに並べられているアルバムのうちの一番左を手にとった。少しほこりがかっている表紙を軽く拭いて、開く。最初のページに出てきたのはお父さんとお母さんが二人で海にいる写真。二人とも若い。デートのときの写真だ。二人にもこんなときがあったんだななんて思いながら、次のページをめくる。次のページにも、二人がドライブだったり水族館だったり、いろんなところに行っている写真がたくさん出てきた。何度かページをめくって、ふと一枚の写真に目がいく。お母さんが少し出たお腹を撫でている写真。お腹に私がいるんだと理解するのに長くはかからなかった。そのあとの写真はほぼお母さんのお腹の記録で、どの写真もお母さんがお腹を見ながら微笑んでいた。そんなお母さんの姿に、なんだか目頭が熱くなる。
そのアルバムはお母さんのお腹の写真で終わっていて、私はアルバムを閉じてすぐ次のアルバムを開いた。次のアルバムを開くと、出てきたのは保育器に入って寝ている赤ちゃんと、笑顔でこっちにピースを向けているお母さん。その写真を見た瞬間、涙が溢れる。いつも喧嘩ばかりで気づけなかった。私が大事にされながら生まれてきたこと、たくさん愛情をもらって育てられたこと、お母さんが怒るのは、私を心配しているからだということ。ページをめくるにつれて、私が大きくなっていって、寝ているとき、遊んでいるとき、食べているとき、泣いているとき、笑っているとき、たくさんの写真が出てきた。どの写真からも愛が感じられて、同時にちっちゃい頃はカメラを持って笑うお母さんを見るのが好きだったなと思い出す。最後のページにはアルバムに入りきらなかったのか写真がいくつか挟まれていた。アルバムに入りきらないほどたくさん写真を撮ってくれていたことに、愛されていることをさらに感じて涙が止まらなくなる。
思い返してみれば、私の好きな食べ物が入ってるお弁当も、アイロンがけされた制服のシャツも、塾の送り迎えにも、たくさん愛があった。私が気づかなかった。気づこうとしなかっただけ。偶然見つけたアルバムが教えてくれたお母さんの思い。これからは、その愛情を、思いを、ちゃんと受け取っていきたい。お母さんが帰ってきたら言うんだ。
「いつもありがとう。」